

## 「～くさい」の語誌

漆 谷 広 樹

### 1 問題の所在

「～くさい」を伴って構成される形容詞の意味には「(1) そんなにおいがする。そんなにおいを感じる。(2) そのような傾向がある。そんなふうに見える。それに似ている。らしい」(『日本国語大辞典』)の2つの意味がある。歴史的に見ると「～クサイ(クサシ)」で構成される語は、中古では『源氏物語』に「黴くさい」が見られるものの、あまり多くの語は存していない。「～クサイ」は中世以降、上接要素を拡大するなどの方法で、現代にいたるまで造語力を示している。

現代語での「～クサイ」の使用例を見ると、次のような場合がある。

- (1) パスワード変えられてるくさいしもうほんとクソ (ヤニちゃん@sa\_s7t・5m 2023/05/16)

この場合は、「～クサイ」が句に接続し、モダリティの機能を持つようになった場合である。こうした例はSNSなどで見受けられるものである。

本稿では、形容詞が歴史的に変化する様子を捉えようとする際、こうした「～クサイ」のように長期にわたり造語力を示す語が、どのような変化が生じたのかに注目して、観察していく(注1)。ここでは「～クサイ」が現代に至るまでの状況を見ていくことで、形容詞の歴史的変化の一端を見ていく。なお本稿では、古語形「～クサシ」の場合も「～クサイ」と表記していく。

### 2 「～クサシ」の状況

本稿では「～クサイ」の語例を広く収集する方針であるが、まずは『日本国語大辞典』に立項されている「～クサイ」について扱う。『日本国語大辞典』に立項されている「～クサシ(クサイ)」は150語が存している(注2)。その内訳について時代別に見ると、中古…3語、中世…18語、近世…65語、近代…63語、例ナシ1語である。以下、『日本国語大辞典』およびコーパスで収集した例を含め、時代ごとに見ていく。

#### 2.1.1 中古の場合

中古和文での資料が例として立項されている「～クサイ」は、「子持ちくさし(宇津保物語)」、「黴くさし(源氏物語)」、「かはむしくさし(堤中納言物語)」の3語のみである(注3)。これらはいずれも名詞に下接する場合である。以下、例を見ていく。

「子持ち臭い」

- (2) 御台参り、御菓物など参りて、まかてたまひて、二ところ臥したまひて、中納言、「子持ち臭からぬ衾持て来」とて、香の唐櫃より、染み返りたる持て参りたれば(宇津保物語)

この例の現代語訳には、「子持ち臭くない布団を持ってこい」というので、香をたきしめた唐櫃から香のしみ込んだ布団を持ってまいる」とある。ここでは「～クサイ」は「好

(2)

「～くさい」の語誌

ましくない匂い」についての表現である。

「黴臭い」

(3) ささやかにおし巻きあはせたる反故ども  
の、かびくさきを袋に縫ひ入れたる」(源氏物語 橋姫)

ここでは、「黴のにおいがする」の意である。「～クサイ」は、好ましくない「匂い」について表現する語である。この語が、比喩的に「古くさい。古めかしい。」という意味で使用されている例が見られるようになるのは、近世以降の場合である。

「かはむしくさし」

(4) うらやまし花や蝶やと言ふめれど烏毛虫  
くさきよをも見るかな(堤中納言物語)

現代語訳には「毛虫くさい目をみて毎日を過ごしているなんて」とある。毛虫の匂いや外観への嫌悪感から生まれた語であると考えられる。

中古に見られる「～くさい」は、いずれも「匂い」についてのマイナスイメージを表現する際に使用され、比喩的な意味では使用されていない。

## 2.2 中世の場合

『日本国語大辞典』で、中世以降に出現する「～クサイ」に上接する要素の品詞を見ると、名詞の場合が13語、動詞連用形の場合が3語、形容詞の場合が2語で合計18語が存している。まず、名詞の場合について見ていく(注4)。

あかがねくさい(蒙求抄)、垢くさい(文明本節用集)、油くさい(類聚名義抄)、かなくさい(天正狂言)、倉くさし(伊呂波字類抄)、さかくさい(色葉字類抄)、熟柿くさい(虎明本狂言)、しわらくさい(玉塵抄)、乳くさい(詩学大成抄)、人くさい(虎明本狂言)、ふすぼりくさい(日葡辞書)、仏くさい(三十二番職人歌合)、水くさい(沙石集)

上接要素が名詞の場合について、その語種を見ると他の語とは異なる場合として「熟柿

がある。ただこの語は和語「うみがき」(『散木奇歌集』)を音読した場合であり、この時期は「～クサイ」は基本的には和語に下接している。

また、この時期は「～クサイ」がどのようなジャンルに出現しているのかについて見ると、説話や物語類では、『沙石集』『御伽草子』の用例がある。今回とは別に行った調査でも、中世では日記・紀行、歴史物語、軍記物語などには「～クサイ」は出現していないことがわかる(注5)。これら以外では、上記に見るように漢字の訓として古字書に出現する場合は5例存している。また、狂言や抄物で見られる例が比較的存していて、出現するジャンルは中古和文を受け継ぐジャンルとは異なることがわかる。

また、この時期には、「物」「人」「場所」から「好ましくない匂い」を感じた際に使用されている語が多いのだが、それが変化しつつある状況が見られる。

「人くさし」

(5) あら人くさやな(虎明本狂言 朝比奈)

この場合は「人間のにおいがする」という意味であり、さらには「人のいそうなけはいがする」(『日本国語大辞典』)の意も表現するようになる。「～クサイ」の上接要素の意味が「人の匂い」から、「雰囲気」や「性質」を表す意味として使用されている場合である。

『日本語大辞典』で、接尾辞「くさし」を見ると「(2) そのような傾向がある。そんなふうに思える。それに似ている。らしい」とあり、用例として「山寺は法師くさくて居たからず」(梅尾明恵上人伝記(1232～50頃))が挙げられている(注6)。この場合は「いかにも法師がいそうな雰囲気で」の意味と考えられる。「居たからず」とあることから、好ましくない状況に用いられていることがわかる。

「スメハラ」という語があるように、「匂い」は好まれないものとして表現される場合がある。「法師くさし」は「匂い」だけでな

く、法師が持つ雰囲気がマイナスイメージの意味を持つ語として使用されている。これと同様の語には「仏くさい」があり、「仏教的な気分が感じられる。坊主くさい。抹茶くさい。」(『日本国語大辞典』)の意である。これらは神仏、権威のある人物や職業を表す語に「～クサイ」が下接し、連想される「雰囲気」や「性質」をマイナスイメージとして表現する語になっている(注7)。こうした語例は現代でも、「教師くさい」等に見られる場合である。

また、「物」や「状態」を意味する場合の名詞に「～クサイ」が下接した「ち(乳)臭い」も、「乳のにおいがする」の意だけでなく「おさない。幼稚である。」(『日本国語大辞典』)のように比喩的な意味を持つ場合も見られる。また、次の「水くさい」の場合は、その性質が強いことを意味する語であると考えられる。「みずくさい」

(6) 日來はちと水くさき酒にてこそ候ひしに  
(米沢本 沙石集)

この語は「水分が多くて味が薄い」(『日本国語大辞典』)という意である。「匂い」の意味ではなく酒の中の「水分」が強いことについての表現である。この語は近世になるとさらに比喩的な用法として「愛情が薄い。他人行儀である」の意にも用いられるようになる。

形容詞の場合では「青くさい」(御伽草子)、「悪くさい」(玉塵抄)の2語である。いずれもこの時期には、「匂い」のマイナスイメージを表現する語である。

「青くさい」

(7) いかにも色めきあへる茶なりとも、酒をきらふものならば、あをくさし、水くさしといわれん事、目のまへなれども」(御伽草子 酒茶論)

この語は「青草のような匂いがする。なまなましい、いやな匂いという」の意である。やはりここでは「匂い」を表す意味の語であったが、近世になると「未熟である。経験が足りない。」(『日本国語大辞典』)の比喩的な意

味で用いられるようになる。

動詞連用形+「～クサイ」の場合は、「こがれくさい」(観智院本類聚名義抄)、「こげくさい」(古活字本毛詩抄)、「ねだりくさい」(虎明本狂言)の3語である。次の場合のように「匂い」とは関係がない例も見られる。「ねだりくさし」

(8) そなたは言語道断ねだりくさひことをおしやる(虎明本狂言 乞鉢)

この語は、「ねだるようである。ゆすりめいている。強請者(ねだりもの)らしい。」の意である。動詞「ねだる」の意味は「ねだること。強いて求めること。ゆすること。また、その人」(『日本国語大辞典』)である。この場合「～くさし」は「ねだる」という好ましくない行為について使用されている。「～クサイ」は、「匂い・臭気」から「雰囲気」・「性質」を表現し、また上接要素のマイナスイメージを強調して表現する場合も見られるようになった。

また、虎明本狂言には「ねだり」を上接要素とする語に「ねだりがましい」がある。「いかにもねだるようである。仕組んでゆするようである。」(『日本語大辞典』)動詞連用形に下接した「～がまし」についてはあまり多くはないが、中古に「あざれがまし」「いられがまし」「えがまし」「くつろぎがまし」「ねじけがまし」等があるが、「～クサイ」はこうした表現を凌駕するには至らず、稀な場合として存している。

なお、『日本語大辞典』に立項されていない語で、日本語歴史コーパス(CHJ)で時代を鎌倉、室町時代に指定して場合に見られる語は、「松脂くさい」が『虎明本狂言』に延べ3例見られるのみである。

以上、この時期の特徴としては、上接要素の意味が「匂い」から想像される「性質」や「行為」の意味になる場合があり、「匂い」について表現する語ではなく、雰囲気や性質について表現する場合が増加した。さらに「水

(4)

「～くさい」の語誌

くさい」の場合のように「～の要素が強く感じられること」の意と解される場合も見られるなど、新たな用法が確認できる。

## 2.3 近世の状況

ここでは、近世以降に出現する「～クサイ」について以下で詳しく見ていく。用例は『日本国語大辞典』に立項されていた語の他、日本語歴史コーパスを用いて収集したデータ以外にも『新編日本古典文学全集』を用いて得られた結果も併せて考察を行っていく。

### 2.3.1 辞書での「～クサイ」

まず『日本国語大辞典』に登録されている66語について、上接要素の品詞により分類すると、次のようになる。

名詞+クサイ56語 (84.8%)

形容詞+クサイ…5語 (7.6%) 甘くさい  
旨くさい おかしくさい 遅くさい 古臭い  
動詞連用形+クサイ…2語 (3.0%) いりく  
さい こげくさい

その他3語 (4.5%) …そそっくさい、ちよっ  
ぼくさい、にじくさい

まず、名詞+「～クサイ」について詳しく見ていく。「～クサイ」に上接する名詞の意味を、二種に分けると、次のようになる。

ア)「匂い」の意味を持つ場合…28語、

汗、息、いきれ、磯、煙硝、かんこ、きな、糞、伽羅、けだもの、けぶり、こわめし、酒、小便、すし、血、乳、土、どろ、ぬかみそ、畑、櫃、ひな、ひなた、抹香、饅頭、味噌、虫<sup>(注8)</sup>  
イ)「匂い」以外の意味を持つ場合…28語 (形容動詞語幹の場合も含む)。

阿呆、あんだら、男、いんげん、胡散、横柄、孔子、高慢、在所、古文、自慢、邪魔、しゃら、辛気、人物、とろ、どん、ねち、のろ、馬鹿、ひね、分別、坊主、むね、勿体、やに、理屈、愠気

これらは「人」、「場所」を表す意味の他、「性質」、「雰囲気」などを表す意味の語である。

こうした場合には中世では「匂い」のマイナスイメージを表現する語である場合が多かったが、この段階では「匂い」以外の意味である「雰囲気」や「性質」の意味の要素に下接して用いられる場合も増加し、両者が同程度の割合で出現していることがわかる。なかでも「在所」「古文」「自慢」「分別」「理屈」といった抽象的な意味を持つ語の場合で、上接要素自体にはマイナスイメージがない語に「～クサイ」が下接する場合も増加傾向にある。

ただ、元々は「匂い」を表す意味の語では、「～クサイ」が下接して比喩的な意味を持つ語になった場合でも、好ましくないイメージを保持し続け、マイナスのニュアンスからは離れていない。

「伽羅くさい」

(9) 今の伽羅臭ひ沈六殿が、皆にしやるのみならず、他人の金迄借り込で (談義本・教訓雑長持 三)

「伽羅」は元々優良な香木の事である。その優良さを逆の意に捉えて「不相応にみえを飾って、こしゃくである」(『日本国語大辞典』)の意味になっている。

また「～クサイ」の上接する名詞の語種を見ると、ア)では28語中「煙硝、伽羅、小便、饅頭、味噌」の4語が、イ)では28語中「いんげん、胡散、横柄、高慢、在所、古文、自慢、邪魔、辛気、人物、馬鹿、分別、坊主、勿体、理屈、愠気」の16語が漢語であり、56語中20語 (35.7%)と割合が高くなっている点にも、中世とは違いが存している<sup>(注9)</sup>。やはり、「匂い」の意味から離れた、抽象的な意味を持つ語にも「～クサイ」が下接するようになったことを示している。

次に、形容詞+「～クサイ」について例を挙げながら見ていく。

「うまくさい」

(10)「鍋どころあまた、めうめうと湯煙たちて、うまくさき匂ひのここまで薫りて」  
(随筆・癩癩談)

「うまそうであるさま。うまそうにおうさま」(『日本語大辞典』)の意で、この場合「くさい」は「匂い」のマイナスイメージは表していない。類似の構成の語としては、「あまくさい」があるが、これは「臭さ」も表現するマイナスイメージの語である。ただ、以降の例を考えると、萌芽的な場合ではないか考えることができる(注10)。

「おかしくさい」

(11) みんなしてたべいんした跡で、新造衆もやりて衆もどふかおかしくさい、むねがわるいとおさんどんがもとしなんす(洒落本 郭中掃除雑編)

ここでは、「どうも調子が変わるようだ。具合が悪いような感じがする」(『日本国語大辞典』)の意であり、「～クサイ」を伴わずにも表現可能と考えられる場合である。「おかし」に何か新たな意味を付加するのではなく、「おかし」の様子を強調しているものと考えられる。

残りの「遅くさい」「古臭い」については、マイナスイメージの意味を持つ語であることはこれまでの場合と同じである。ただこのマイナスイメージは、上接要素が既に持っている意味である。この場合「～クサイ」は、上接要素を強調する意味で使用されていると考えられる。

### 2.3.2 辞書以外での近世の「～クサイ」

まず、辞書には登録されていない「～クサイ」の語例を求めたが、あまり多くは得られなかった。

『日本国語大辞典』には登録がなく、CHJで対象を江戸とし検索を行った。検索は、キーを指定せず、キーから1語に語意素読み「クサイ」で検索した。その結果、辞書に立項がない場合は「置屋くさい(洒落本)」、「位牌くさい(洒落本)」、「儒者くさい(人情本)」の3語である。いずれも上接要素は物や場所の意味であるが、その物や場所についての「匂

い」を表現する語ではない。それらから感じられる「雰囲気」や「性質」をマイナスの意味に捉えた語になっている。

「位牌くさい」

(12) わつちも疫病にとりつかれて。よつほど位牌くさく成やしたがようようの事で全快て(洒落本 花街鑑 1822)

この場合、「位牌」は比喩的に死を意味しているものと考えられる。「死にそうになった」ということを間接的に表現している場合である、

また、『日本国語大辞典』には登録がなく、『新日本古典文学全集』に用例が見られるものは、次の2語のみである。

「すし桶くさい」

(13) 鬼神といはれたる。王子にたてづく某がおのれらに恐れうか。すし桶くさい奴らと、かんらんらとぞわらひける。(近松 用明天皇職人鏡)

この例について頭注を見ると、「馴れ過ぎて不愉快の意の「すし」と「鮓」の言いかけ」とある。したがってこの語は「匂い」についての表現ではなく、相手を不快な奴と見下す意味の語である。

もう1語は「どんくさい」に接頭辞を冠した「あたどんくさい」であり、辞書に登録されている以外には、多くの語が存しているわけではないことがわかる。

以上のことから、「～クサイ」は、中世から近世にかけて直接「匂い」を表現する以外に、比喩的な意味で使用される場合が増加することや、上接要素に漢語の場合が増えるなどの変化が見られる。

また、形容詞に下接した場合には、「～クサイ」が強調の意味で使用される場合があることなど、変容している様子を窺うことができる。

### 2.4 近代の状況

ここでは近代以降に出現する「～クサイ」に

(6)

「～くさい」の語誌

ついて、まずは『日本国語大辞典』に立項がある「～クサイ」から見ていく。上接要素の品詞を見ると、名詞の場合が54語、動詞連用形の場合が「いぶりくさい」「しめりくさい」「てれくさい」3語であり、形容詞+「～クサイ」の場合は存していないことがわかる。

まず「～クサイ」に上接する要素が名詞(形容動詞語幹も含む)の場合の意味について見ていく。

ア)「匂い」の意味を持つ場合9語…薬、魚、塩、しけ、すす、どぶ、ペンキ、ほこり、むれ

イ)「匂い」以外の意味を持つ場合45語…アーメン、あほ、いたずら、田舎、陰気、因縁、男、親、おやじ、女、唐、きつね、窮屈、けち、子供、在郷、思案、じじ、シャボン、執念、十六、所帯、素人、西洋、世間、禅、他人、だら、ドル、涙、人間、熱、舶来、バタ、はんか、病人、貧乏、べらぼう、真面目、未練、鍍金、面倒、野暮、幼稚、老人

これを見ると、近世では「匂い」と「匂い」以外の場合は同程度であったのだが、近代では「匂い」以外の意味を表す場合の方が54語中45語(83.3%)と割合が高くなっている。ここで、「匂い」以外に分類される場合について詳しく見ると、多くは人の「属性」、「性質」や「性格」を表す語である。「～クサイ」を伴うことで、いかにもそうした印象を受ける人物であることがマイナスイメージの語として表現される。人物以外についても、場所や物、事に下接した場合も、その場所や物についてマイナスのイメージを表現している。「熱くさい」

(14)大部分の部屋の中が熱臭いと云った(夏目漱石 三四郎)

この語の意味は、「熱気がこもっている」(『日本語大辞典』)である。部屋が暑いことを不快に感じ表現した語である。上接要素の「雰囲気」「性質」が強く感じられることから

受けるマイナスのイメージを表す意味の語になっている。

また、「～クサイ」の上接要素について語種の面から見ていく。

近世で増加した漢語の割合は、上記の名詞54語中以上で挙げる19語(35.9%)で、あまり変化は見られない。

陰気、因縁、窮屈、在郷、試案、執念、所帯、西洋、世間、他人、人間、舶来、病人、貧乏、未練、鍍金、面倒、幼稚、老人

漢語を上接要素とすることは、やはり具体的な「匂い」ではなく、漢語の持つより抽象的なイメージについての表現である。この段階では「～クサイ」は「いかにも～らしい」という意味を持つ語として造語力を保っている。

漢語以外では「アーメン、シャボン、ドル、バタ、ペンキ」の5語(9.1%)で、外来語の場合が見られるようになる。「ペンキくさい」は、「匂い」に関わる表現であるが、これ以外の場合は「匂い」の意味は持たず、上接要素から受ける印象について表現する語になっている。

「ドルくさい」

(15)神戸なる其商館の立者とは兼ねて窃かに聞き込み居たれど、斯くまでに弗臭き方とは思はざりし(国木田独歩 おとづれ)

この語は「金銭の力を最上のものと考え、大事に思うようすである。」(『日本国語大辞典』)の意である。「ドル」は金銭主義をマイナスに捉える意味として使用されている。

漢語に下接する場合には、元々持っていたマイナスの語感を持っているが、外来語に下接した場合、次の例のようにマイナスの語感を持たない場合がある。

「シャボンくさい」

(16)内地雑居後は社会の有様、どうやら何事もシャボン臭くなりぬ。(坪内逍遙 内地雑居未来之夢)

この語の意味は「石鹸のにおいがする。ま

た、文化や習俗が欧米風で、目新しいさまである。」(『日本語大辞典』)とある。この場合「シャボン」は「西洋的な目新しさ」を象徴する意味の語であり、マイナスイメージは持っていない。

さらに、現代語では「～クサイ」以外の表現が用いられる場合でも、この時期には「～クサイ」で表現される場合がある。

「親くさい」

(17) 邪慳で親を親臭いとも思ッてゐないから、悪くッて成りゃしません (二葉亭四迷 浮雲一)

この語の意味は「いくらか親らしく思われる。親の感じがする。」(『日本語大辞典』)とある。すなわち現代語では「～らしい」で表現される場合である。BCCWJで文字列を検索すると「親らしい」は14件、「父親らしい」が23件、「母親らしい」が31件検索されるが、「親くさい」は検索されず、この語は広く使用されている訳ではない。

「～くさい」と「～らしい」について、『現代形容詞用法辞典』には、「彼は学者らしくない」の説明として、「学者のもっている悪い面がないという意味のほめ言葉になっている。学者であることをプラスでとらえる時には「～らしい」を用いて、「学者らしくない」とする。こうすると、学者のもっているよい面がないという意味になる」とある。「親くさい」の場合では、親の悪い面と考える必要はなく、『現代形容詞用法辞典』の記述とは異なる使用法と考えられる。

#### 2.4.2

次に、明治大正期の状況について、日本語歴史コーパス(CHJ)でのデータを見ていく(注11)。異なり語数で64語の「～クサイ」が得られるが、これらの中で『日本国語大辞典』には立項されていない名詞の場合を挙げると次の26語である。なお上接要素が形容詞の場合は、既にみられる語のみであった。

「匂い」に関わる名詞13語…温泉、魚、糠、蛇、酒精、醤油、石油、潮、馬、肥、蕪、葉、麝香

「匂い」以外の名詞…8語 学者、愚、遅鈍、文士、法律、翻訳、耶蘇、役人

固有名詞 5語…いづ、支那、高天原、トルストイ、山縣

「匂い」に関わる名詞が半数であることがわかる。これらの語の場合は、上接要素の「匂い」について表現する語であり、「～クサイ」と結合することで新たな意味を持つ語になった訳ではないため、辞書には登録されなかったものと考えられ、この時期の特徴を示すものではない。

これまでとは異なる点として、固有名詞の場合が複数見られるようになったことが挙げられる。これは、「いかにもその人物らしい」ことや「その場所らしい」ことを表現する語になっている(注12)。これは、「～クサシ」がより個別的なことを表現する際に使用されるようになっていく過程にあるものと考えられる。例えば「陰気くさい」では、抽象的、一般的な意味を持つが、固有名詞に下接した場合には、より個別的な意味を表すことになる。個別的な意味を持つ要素とも結び付けば、その使用は拡大していくものと考えられる。

これまで固有名詞に「～クサイ」が下接した例として「孔子くさし」があった。孔子という聖人がマイナスイメージに捉えられ、「しかつめらしい。堅苦しい」(『日本語大辞典』)の意として用いられた。この場合「孔子」は個人を指すのではなく、権威的な人物の象徴としての意味を持っている。権威がある人物がマイナスイメージで捉えられることは、中世でも「法師くさい」「仏くさい」の場合があった。上接要素が職業や属性を表す意味や個人ではなく象徴としての意味の語から、個人を指す固有名詞にも使用されるようになり、対象をより限定して指す語として使用されるようになる。こうなると「～クサイ」は、さら

(8)

「～くさい」の語誌

に個人的な用語としても使用されるようになり、上接要素はさらに多様になっていくものと考えられる。

この時期の特徴としては、「～クサイ」と上接要素については、漢語だけでなく新たに外来語や固有名詞の場合が存することが挙げられる。また、意味についても、必ずしもマイナスイメージの意味の語ではない場合が出現して、近世までとは異なる状況が観察される。

## 2.5 現代の状況

ここでは「～クサイ」の現代語としての出現状況について見ていく。用例は現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) から、さらにより口語的な場合についてX (旧Twitter) から「～クサイ」の用例を収集する。

### 2.5.1 コーパスでの状況

ここではBCCWJで検索した結果について見ていく。検索方法は、キーを名詞とし、キーから1語、語意素読みクサイとした。結果、異なり語数で232語を得た。ここから『日本国語大辞典』に立項されている語を除くと、149語になる (注13)。

この149語のうち、匂いに関わる名詞は80語 (53.7%) であり、これまでとほぼ同じ割合を示す。

ただ、149語について上接要素の語種を見ると、漢語の場合は55語 (36.9%) と割合は先に見た場合と大差ないが、外来語の場合については31語 (20.8%) と割合が高くなっていることがわかる。以下、具体的な語について見ていく。

外来語の場合31語…アルコール、アンモニア、インスタント、インタビュー、インテリ、ウイスキー、エリート、オフサイド、ガス、ガソリン、カルキ、カレー、キッド、キムチ、グリス、ココナッツ、ゴム、コンクリート、シンナー、セロリ、タバコ、チーフ、テロリ

スト、ニコチン、バイオリン、バター、パンク、ピール、ミルク、レトルト、OB

これらの語の中で「匂い」に関わる意味の語は21語である。ここでは「匂い」とは関係のない場合はどのような場合であるのか用例を見ていく。

「インタビューくさい」

(18) 通例ののらくらした生ぬるい内容を、通例のインタビューくさい言葉で表現したものさ。(不死の怪物 ジェシー・ダグラス・ケルーシュ 野村芳夫訳 文藝春秋 2002)

この例では「あたかもインタビューのように」という意味で使用されている。ありきたりのインタビューの様であることを否定的に捉えたニュアンスであるため、マイナスイメージを持つ「～クサイ」が使用されたものと考えられる。

「オフサイドくさい」

(19) ドゥーのクロスにサガノフスキーがヘッドで合わせオフサイドくさいけど、九十分終わって (Yahoo!ブログ 2008年)

この例では、「オフサイドという反則を犯した状況だと思われる」という意味である。この場合で、「～クサイ」で表現された理由には以下のことが考えられる。一つは「オフサイド」という反則について使用された場合であり、「好ましくない」状況についての表現である点である。もう一つは、現況は発話者が考えているものとは反する判定に対する表現であることである。これは、発話者にとって「好ましくない」状況であるため、マイナスイメージを持つ「～クサイ」が使用されたものと考えられる。ただ、次の例のような場合も見られる。

「バイオリンくさい」

(20) これはモーツァルトやベートーベンには決して見られないもので、まことにバイオリン臭い節まわしがよく出てくるのだ。(井上和雄 ハイドンロマンの軌跡

音楽の友社 1990年)

この語は、「いかにもバイオリンを使用した」曲調であることについて表現した場合例である。この場合、特にマイナスのニュアンスは表現していない。

さらに、固有名詞+「～クサイ」の場合にも、次のような例が見られる。

(21)第三試合に出てきた5人組「ハッスルレンジャー」正体は?イエローが橋本くさい。(Yahoo!知恵袋 2005年)

この例では、レンジャー姿に仮装をして登場した人物を見て、「たぶん橋本選手らしい」と推測する意味である。この場合についても、特にマイナスのニュアンスが表出されている訳ではない。

池上尚(2013)では、「上接句の表す事態に対する話者の推量を表す」場合の「～クサイ」を「文末外接続形式」として、その推量は「ラシヤやヨウダなどの推量には評価性の限定がないのに対し、クサシはマイナスに限定されるようである」としている。

しかし「～クサイ」は先に見た名詞に下接する場合でも「シャボンくさい」や「バイオリン臭い」のようにマイナスのニュアンスを持つ場合の使用であると限定されない例が近代以降に確認される。

「～クサイ」が直接「匂い」に関わらない名詞に下接すると、例えば「男くさい」ではまず、男性から感じられる「匂い」などの具体的なイメージから「衣服、持ち物、部屋などに男の体臭がある」という表現になる。さらには男性をより抽象化したイメージとして捉え、「男性を感じさせる、身なりや態度である」(『日本国語大辞典』)の意味を持ち、「いかにも～らしい」へと変わっていく。そうした比喩的な意味としては、「匂い」とは関わらない名詞に下接した「親くさい」「病人くさい」なども使用される。これは、「匂い」ではなく属性についての表現し、「いかにも～らしい」の意の語になる。こうした場合は

「～クサイ」は上接要素のマイナスのイメージを表現する語であり、「～クサイ」のマイナスのニュアンスから離れることはなかった。

一方で「～クサイ」は、上接要素が固有名詞や、より具体的な意味を持つ要素などにも下接するようになる。そうした変化に伴い、表現する意味もマイナスのイメージから離れた場合も見られるようになった。

さらに、昭和・平成書き言葉コーパス(SHC)で語例を求めると、次のような場合も見られる。

「選挙対策くさい」

(22)教科書無料配布というのは、選挙対策くさい。(文春 1973-12)

「段取りくさい」

(23)脚本としては、あそこは段取りくさいですよね。(文春 2005-12)

これらの場合についても、好ましくないことを推測するモダリティとして使用である。以上のような例は週刊誌という媒体に見られる例であり、こうした「～クサイ」の使用は、若者の使用だけには止まらない方向にあることを示すものである。

## 2.5.2 口語的な「～クサイ」の状況

ここでは、以上に見た場合よりさらに口語的な「～クサイ」の状況について見ていく。方法としては、X(Twitter)の高度な検索を用いて用例を見ていく。2日間に指定して用例を求めた結果、得られた語数は異なりで105語になる(注14)。以下、これまでとは異なる用法について見ていく。

「セーフくさい」

(24)セーフくさいけどマリンだから確証なしで判定そのままっぽい(@m34szk 20230901)

ここは、判定とは異なり「セーフだろう」と推測している場合である。この場合は、審判が下した判定に対して、否定的な見解を

持っていることが発話者にとってマイナス要因であるため、「～クサイ」で表現された場合と考えられる。

(25) またタイヤパンクしたくさい。

(@nishiHE12NISMO 20230901)

この例は助動詞「た」に下接している場合で、眼前に展開される不都合な状況について、好ましくないことが起こっていることを断定的に表現するのを避けた言い方である。こうした表現は一般的なものと見られ、条件を「パンクしたくさい」としても約90件が検索される。

いずれの場合でも「好ましくない状況」について、どのような事態になっているのか、心的状態を婉曲的に表現している。こうした場合には、すべてが「好ましくない状況」に用いられているかという、やはり、必ずしもそうではない場合も出現するようになる。

(26) ケーブル等の絶縁処理してからプリアンプめっちゃ調子良い全く電源落ちない。

これが原因だったくさい。 (@CHOROS\_gt20230901)

この例では「電源が落ちないという良い調子」であることを表現した場合である。「～クサイ」はマイナスのニュアンスとして用いられている訳ではない。こうした表現は、口語的でカジュアルな場において、推量のモダリティとして機能している。

「終わったくさい」

(27) 8月終わったくさいね (@keikoto\_knit)

この場合も、「～クサイ」を用いることで「終わってほしくない」という心的態度が表現されると考えられる。話者の事柄に対する心的態度が容易に表現できるというメリットがあり、使用が広がりやすいのではないだろうか。

ここに見たように「～クサイ」の上接要素が句である場合が見られる。これは単語よりも説明的で具体性を持った要素に「～クサイ」が下接する場合である。今回検索したのはごく短期間であるので、実際にはこうした使用

例は幅広く行われているものと考えられ、上接要素の範囲が拡大していく要因となる。

それではどのような事情から、こうした具体性を持った語に「～クサイ」が下接するようになったのだろうか。その理由として二つのことが考えられる。一つは、より具体性を持った語に「～クサイ」を下接させることは、ニュアンスを詳細に伝えることが可能になるためであると考えられる。

さらに、「～クサイ」が以上のように句に接続するような場合は、歴史的に見ると他の接辞にも見られることである。例えば、接尾辞「ゲ」は「しろしめしたりげ」(『源氏物語』)、「折に合はず」と思ひたりげ」(『平家物語』)などの例が存している。こうした語は時代が下るとともに増加傾向にある場合である。

また、Twitterの例では「～クサイ」が直前の語より長い要素に影響を及ぼす例が多く存している。こうした「句接続のクサイ」については以下に言及がある。大上紗弥(2020)では、「～クサイ」と「ぼい」の使用法について「句接続の「クサイ」」の状況について、年代別にアンケート調査を行った結果、「若者層では許容されやすいが、年齢層が上がるにつれ許容度低下」であり「未定着」であるとしている。若い世代から広がる用法が、こうした状況であることは通例であろう。

以下、「～クサイ」のこうした用法が、より口語的で若い世代から広がった理由について考えていく。これは「～クサイ」がマイナスのイメージである場合が多いことや、「照れや恥じらう気持ち」が容易に表現できることとの関連が考えられる。これは「照れくさい」気持ちで表現する際、少し粗雑な表現が使用されるということではないだろうか。米川明彦(2009)では、若者ことばが生まれる青年期の心理を、「青年期は自己を発見するアイデンティティ探求の時代のため、人と比較し、劣等感や優越感を持ちやすくなり、人を批判的に、あるいは笑いを入れている評価

語が多くなる。」としている。「～クサイ」は、マイナスのイメージを持った評価語であり、若者ことばが使用される際の心理と合致する点がある。さらに若者ことばには「～とか」「～たり」「～的」のように断定を避ける表現が、「口癖」のように使用されることもあり、「～クサイ」もこうした断定を避ける表現と同じ機能が認められるのではないだろうか。

ここでは「～クサイ」に類似した表現との違いについて考えていく。「～みたいだ」があり、さらに書き言葉的な表現としては「～(の) ようだ」もある。また、「ラシイ」や「ぼい」も類似した意味を持っている。この点については先行研究があり、山下喜代(2008)は「一ぼい」を「自己の基準に照して、名詞への傾斜・偏向と捉えた感覚に基づく表現」、「一らしい」を「自己の基準に合致すると捉えた表現」、「一くさい」を「自己の基準に照して、濃厚で過剰であると捉えた感覚に基づく表現」としている。「～クサイ」について、今回取り上げた例で考えてみると、「バイオリンくさい」や「橋本くさい」などの場合では、「可能性が高い」ことを表現しているものの、「過剰」とまでは捉えられない場合が存しているものと考えられる。

このような「～クサイ」は現在では若者中心の使用法であり、SNSなどで打ち言葉として使用される場合が多いものと思われる。しかし、「～クサイ」がここに至るまでの経過から考えると、これは流行語のように一時的に急激に発達したのではなく、徐々に用法を広げてきたことが観察された。また「～クサイ」を用いることには、表現上のメリットがある。こうした理由から、「～クサイ」の使用は続いていくものと考えられる。

### 3 まとめ

以上見たように、意味変化と上接要素の意味や語種の観点から、「～クサイ」の語誌を-

まとめると次のようになる。

「～クサイ」は中古では、具体的な「匂い」について表現する語であり、マイナスのイメージを表現した。中世ではそれが比喩的に用いられ「匂い」以外にも、性質や雰囲気について表現する際にも使用されるようになった。さらに近世では上接要素が漢語である場合も見られるようになり、「匂い」以外の意味に使用される語も多くなり、より抽象的な意味を表す場合が増加する。

近代以降では上接要素が外来語の場合も見られるようになる。そうした場合には必ずしもマイナスのイメージを持たない例が出現する。さらに、現代語では抽象的な意味の語に下接するという限定された方向へ向かうのではなく、句などにも下接して、より具体的な意味を表す要素にも下接するようになった。こうした用法はより口語的な場合で、若者中心の使用であるが、「～クサイ」のこれまでの状況を見ると、さらに使用が広がっていくのではないかと考えられる。

「～クサイ」の歴史的変化は、比喩的な意味を利用したり、上接要素を拡大したりすることにより、新たな表現への要求を満たすという方法であった。こうしたことが、形容詞の歴史的変化はスタティックなものであると捉えられている要因であると考えられる。

### 注

- 1 古代・近代を通して「一クサシ」について豊富な例を扱った研究には、池上尚(2013)がある。
- 2 この数字は、別項目として立項されている場合でも、音変化による場合は同じ項目として数えたものである。例えば、「ちちくさい」と「ちちつくさい」とは別々に立項されているが、ここでは別項目としては扱わず、先の時代に例がある場合のみを取り上げて数えた。また、方言形として扱われる語についても除いた数値である。
- 3 『落窪物語』に「ものぐさい」の例があるが、これは「何となくくさい。」の意であり、「もの

(12)

「〜くさい」の語誌

は接頭辞と考えられ、ここで対象とする接尾辞的な「〜クサシ」とは別に扱う。

- 4 ( )内には、出現時期の早いものを挙げた。『狂言』や『日葡辞書』については、近世前期にかかるものであるが、本稿では中世に含めて扱った。
- 5 今回は別の調査とは、日本語歴史コーパスでは対象とされていない、『発心集』『十訓抄』『古今著聞集』『無名草子』『無名抄』『今鏡』『水鏡』『増鏡』『太平記』『義経記』『曾我物語』『御伽草子』について対象として調査したものである。
- 6 「法師くさし」は見出し語としては立項されていない。
- 7 池上(2013)では、「身分・立場・場所」を表す名詞は、「具体名詞/抽象名詞いずれにも解釈できる名詞」と解釈している。
- 8 「煙硝くさい」は、(うその意の「鉄砲」を、有煙火薬をいう「煙硝」に置き換えて、しゃれた表現)とあり、「匂い」ではなく「うそくさい」の意味として用いられている。
- 9 「いんげん」は『日本国語大辞典』の「いんげん」の項目によると「威権」が語源と考えられる。
- 10 「あまくさい」については『時代別国語大辞典 室町編』(三省堂 2000年)に「血ヲカギテミレバ甘クサキハ死相也」(金瘡療治抄)の登録がある。この場合も「臭気」を表現している。池上(2013)では、「一時的な使用にとどまった」としている。
- 11 検索方法は、検索対象の時代を明治、大正とし、キーを名詞、キーから1語に語意素読みクサイとした結果である。
- 12 「いづくさい」の例は、「この邊の水は鹽分を含んでいるゆゑ、茶を煮てもいづく臭く飲まれる」(真山青果 一室内 1878)であり、この「いづく」は地名を示すと考えられる。
- 13 検索で結果には「〜クサイ」には該当しない場合もあり、これを除いた。また上接要素が形容詞の場合は既出の語のみであるので省略した。
- 14 X(Twitter)で用例を収集した期間は2023/09/01～2023/09/02の2日間である。

## 参考資料

- 『新編日本古典文学全集』(新編 日本古典文学全集 [japanknowledge.com](http://japanknowledge.com))
- 『集団語の研究 上』(米川明彦 東京堂出版 2009年4月)

『現代語形容詞用法辞典』(飛田良文、浅田秀子 東京堂出版 1991年7月)

## 使用コーパス

国立国語研究所(2022)『日本語歴史コーパス』(バージョン2022.3 中納言2.7.2) <https://chunagon.ninjal.ac.jp/chi/>

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(2021.03 中納言2.7.2) <https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccw-int/>

昭和・平成書き言葉コーパスバージョン(2023.05 中納言2.7.2) [shc](https://chunagon.ninjal.ac.jp/shc)

## 参考文献

- 池上尚「接尾辞ークサシ再考—古代・近代の使用状況から」(早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊21号 2013年9月)
- 大上紗弥「句に下接する「くさい」について」(「さいたま言語研究」4号 2020年3月)
- 山下喜代「形容詞性接尾辞「一ばい・ーらしい・ーくさい」について」(講座日本語教育 2008年4月 早稲田大学日本語教育センター)